

趣味を通じた生きがいがづくり

# 十人十色

Vol.15

銭湯巡り

## 家におじゃましている感を楽しむ

——奥野さんはこれまで全国620軒以上の銭湯に行かれたそうですが、ハマったきっかけは何だったのですか？

仕事がうまくいかなかった社会人2年目の頃、フリーパーパーで銭湯がたくさんあることを知り、通勤電車を途中下車して行ってみました。まちの銭湯ってスーパー銭湯とかと比べてお湯が熱いところが多いんですよ。私が「熱っ！」とリアクションしていると、常連さんに「熱いでしょ？ 埋めて（水を入れて）いいよ」と声を掛けてもらいました。そこから「ご近所？」と聞かれて話が弾んだことで、会社と自宅以外の新しい「居場所」を見つけた気分になりました。好き好きに喋って共感し合うけど、話の途中でも「じゃあ、またね」と各々のタイミングで浴槽を出る。付かず離れず、でも同じお湯を分かち合う運命共同体といった雰囲気、心を救われたのです。

——今までで一番衝撃を受けた銭湯は？

すべての銭湯に発見があり衝撃があるのですが、1つだけ選ぶとしたら東京都荒川区にある「帝国湯」さんです。大正時代からの美しい窓枠や縁側が、職人さんによる修繕を重ねながら維持されています。浴室壁面のペンキ絵は数年で描き替えられることが多いんですが、この銭湯ではコーティング加工を施し、あえて保存をしています。女将さんは「今は亡き絵師さんが私の要望に応じて、子どもが馴染みやすいイラストを描き加えて下さったんですよ」と愛おしそうに話していました。脱衣場と浴室から見える庭園も、女将さんご自身で手入れされて四季に満ちています。「古」を守り抜き、それをお客さんと分かち合おうとされている女将さんのおかげで、帝国湯は生き活きとしている。そこに惹かれています。

——銭湯巡りをする際のこだわりのポイントは何ですか。

1つは無理のない範囲で常連さんとコミュニケーションをすることです。浴室に入ると必ず「こんにちは」「こんばんは」と挨拶しますし、旅先の銭湯では「ここのお湯、熱いですね～」が常連さんとの距離が縮まる魔法の言葉。「私たちは毎日入っているよ」とか、「でしよう？ こんな熱いの、誰が入るんだろうね（笑）」とか、どっちにしても会話が生まれるのです。

もう1つは手ぬぐいの柄です。手ぬぐいは薄くてすぐ乾くので、私の銭湯巡りには必須のアイテムです。お湯に浸して

大切に保管し続けられている「帝国湯」のペンキ絵。  
高温多湿の浴室のペンキ絵の維持管理は難しい



奥野 靖子 さん  
会社員

【おくの・やすこ】会社員の傍ら、東京都浴場組合公認ライターとして関東にある銭湯をメディアで紹介したり、銭湯でイベントを企画している。共著『旅先銭湯2.3.4』（さいり社）では出身地である北海道の銭湯を取材執筆。煙突、ケロリン桶など銭湯のモチーフをネイルのデザインに落とし込む「銭湯ネイル」を広めようと奮闘中。



顔に載せ、「蒸しタオル」ならぬ「蒸し手ぬぐい」もします。

ここぞという時は、ご年配の常連さん受けの良い「モテ手ぬぐい」を持参します。私が定義する「モテ手ぬぐい」は1色・渋い柄・地方の柄。秋田の酒蔵の手ぬぐいは、脱衣場で「あなたお酒好きなの？」「そのお酒、知っているわ」って3回も声を掛けられました。お風呂道具はコミュニケーションツールなのだと思います。

——銭湯巡りで気づいたことはありますか。

銭湯の「人の家におじゃましている感」に着目すると、より銭湯が楽しくなるということです。友人を連れていくと、「おばあちゃん家に来たみたい」といわれる理由の1つは、気さくな店主さん、常連さんの「お人柄」。ぜひその場の会話を楽しんでほしいです。もう1つの理由は「手作り感ある工夫」です。例えば、子どもが書いたとおぼしき注意書き、店主さんの趣味一色の休憩室の装飾等。個人事業主さんが多い銭湯ならではの工夫で、なおさらくつろげます。

全国の銭湯を巡っているうちに、「銭湯には地域性がある」ことにも気づきました。風呂桶の「ケロリン桶」は関東より関西のほうが小さいという話はわりと有名ですが、浴槽の配置にも地域性があるんです。関西では浴室の真ん中に浴槽があって、関東は浴室奥に寄せてあります。他にも、私の出身地である北海道釧路地方の銭湯では、開店を知らせる看板は「湯が沸きました」と書かれています。なぜか丁寧語と語り口調の看板なのです。理由を尋ねたら「そのほうが温かそうでしょ？」とのこと。浴室に水飲み蛇口が常備されているのも、北海道の銭湯の特徴です。

——奥野さんにとって、銭湯はどのような存在ですか。

「もう一つのお家」です。どんな自分でも受け入れてくれるし、素の自分に戻れる居場所でもあるから。これからも大好きな銭湯の魅力を発信する活動を続けていきたいですね。

